

1

「ウヰルキンソン タンサン」の発売

Point

- 1 J.C. ウィルキンソンが宝塚で良質な天然炭酸鉱泉に遭遇し、^{もみじだに}紅葉谷工場を建設してミネラルウォーターの生産販売を開始した。
- 2 源泉の湧出量^{ゆうしゅつ}が不足してきたため工場を移転、さらにウヰルキンソン社を設立して「ウヰルキンソン タンサン」を発売し、事業・販路を拡大した。
- 3 戦時中には敵国人企業として資産が凍結され、大日本麦酒^{たいにっぽんばくしゅ}の経営となるが、創業時期から親交のあった山本^{やまもと}爲三郎の助力を得る。

J.C. ウィルキンソンが炭酸飲料の生産販売を開始

英国人事業家のジョン・クリフォード・ウィルキンソンが兵庫県の宝塚で良質な天然炭酸鉱泉と出会ったのは、1889(明治22)年ごろのことである。ロンドンの分析機関に湧出水^{ゆうしゅつすい}の検査を依頼したところ、世界の名鉱泉と肩を並べる良質な食卓用ミネラルウォーターとの結果が得られ、J.C. ウィルキンソンはミネラルウォーターとして事業化することを決意する。ところが、この鉱泉の事業には前例があった。宝塚温泉場を経営していた保生会社が、短期間ではあったが鉱泉を原料に「小判ラムネ」を販売していた実績があった。

そこで、J.C. ウィルキンソンは同社と契約して炭酸鉱泉を買い受けるとともに英国から生産設備を取り寄せた。こうして1890年、温泉場の隣接地に紅葉谷工場を建設して炭酸水の瓶詰め・販売を開始、「TAKARADZUKA MINERAL WATER(宝塚ミネラルウォーター)」として主に海外に輸出した。創業2年後ごろには薬効水「TAKARADZUKA MEDICINAL WATER」を加えて2種類となった。翌1893年には「TANSAN」を商標に制定し、それぞれ「TANSAN(タンサン)」と「NIWO(仁王水)」とし、日本国内向けに販売を開始した。現在では炭酸飲料を一般に「タンサン」と呼ぶが、これはこのときの「TANSAN」が由来となっている。

香港法人の設立と宝塚工場開設

当初は業績不振が続いたが、1901(明治34)年ごろには英国からクラウンコルク^{*1}の王冠設備を導入し、このころになると事業が軌道に乗ってきた。1902年の輸出量をみると、全体で6万函のうちJ.C. ウィルキンソンの「タンサン」は5割にも達した。ちなみに「平野水」は「孔雀印」(資孔雀商会、のちに帝國鑛泉^{ていこくこうせん}株)に合併)などとともにも2割を占めるに過ぎなかった。

生産量の増大とともに紅葉谷工場の源泉が枯渇してきたため近隣で新たな鉱泉を探索、兵庫県有馬郡塩瀬村生瀬(現・西宮市)で良質な鉱泉を探しあて1904年に工場を移転して宝塚工場とした。同年10月には香港法人ゼ・クリフォード・ウヰルキンソン・タンサン・ミネラルウォーター・コムパニーを設立、「ウヰルキ



J.C. ウィルキンソン
(1852 ~ 1923)



宝塚温泉宝来橋のたもとにあった「たんさん水」の看板(矢印)



「ウヰルキンソン タンサン」(初期)

*1 1892年に米国で発明され、日本への輸入は1900年5月から始まった。炭酸飲料の瓶栓に採用したのは日本ではJ.C. ウィルキンソンが最初といわれる。

ンソン タンサン」を発売した。国内で市販する量は少なく、販売の中心はフィリピン、米国、カナダ、シンガポールなどで、一流ホテルに常備される高級品として普及した。同じ1904年には国鉄(現・JR 西日本)福知山線の宝塚駅と生瀬駅とのあいだの側線に宝塚工場の専用貨物ヤード(のち惣川駅、現在は廃止)が設置され、神戸港への輸送の窓口となった。

ウヰルキンソン社では、国内外の商社・代理店や外国航路客船のキャプテンなどを工場見学に招いて工場施設や商品をアピール、また、外国人向けのガイドブックに「ウヰルキンソン タンサン」や「タンサンホテル」の広告を掲載するなど、宝塚への外国人観光客の誘致にも貢献した。

戦時期のウヰルキンソン社

1923(大正12)年にJ.C. ウヰルキンソンが死去したあと、ウヰルキンソン社は長女のエセル・プライスが経営にあっていたが、日中戦争が始まり戦時体制に突入した1937(昭和12)年9月、香港法人の在日資産を承継し、日本企業のクリフォード・ウヰルキンソン・タンサン鉱泉株式会社を設立した。翌1938年には子息のハーバート・クリフォード・ウヰルキンソン・プライスが代表取締役に就任した。

1941年12月に太平洋戦争が始まってからは英国国籍だったプライスが神戸抑留所^{よくりゅう}に收容されるなど、一家は辛酸をなめることになる。翌1942年2月には、同社の株式のほとんどを先の香港法人が所有していたことから外国企業と見なされ、敵産管理法により会社資産が凍結された。同社の株式は1943年3月に日本興業銀行(現・みずほ銀行)が買収したのち、4月に敵産管理人となっていた大日本麦酒^{あじあ}が経営権を握った。

同社の代表取締役には大日本麦酒の常務だった山本爲三郎が就任、同年5月に商号を大日本炭酸鉱泉株式会社と改めた。戦争末期には支店や出張所を次々に廃止、宝塚工場もそのほとんどが軍需工場として川西航空機^{かわせい}(現・新明和工業^{しんめいわ}株)の部品工場となった。

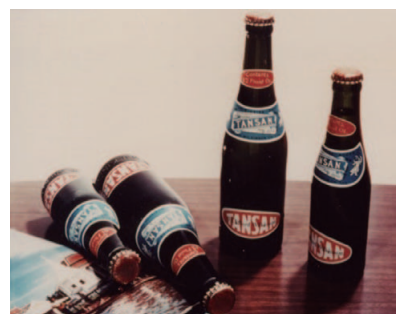
しかし、ウヰルキンソン一家にとって好運だったのは、長年の親交を培ってきた山本を社長に迎えたことだった。^{やまためがらす}山為硝子製造所はウヰルキンソン社の創業時から炭酸水用の瓶容器を納めていた関係で、初代のJ.C. ウヰルキンソンが山本を父親の爲蔵とわけて“ヤング・ヤマモト”の愛称で呼ぶほどごく親しい間柄だった。互いの信頼は戦後もいっそう深まり、当社の清涼飲料の事業発展の礎となった。



旧惣川駅炭酸専用貨物ヤード



ウヰルキンソン宝塚工場



「ウヰルキンソン タンサン」(1920年代)



H.C.W. プライス
(1912～1986)

*2 敵国人の財産を自国政府が管理(実態は接収)するための法律で、日本では1941年12月23日に公布・施行された。

コラム

宝塚温泉と「タンサンホテル」

宝塚温泉が温泉場として本格的に発展したのは明治になってからである。牧田安記『宝塚温泉之今昔』などによれば、1884(明治17)年、岡田竹四郎と小佐治豊三郎が武庫川近くに湧き出る「酸い水と鹹い水^{から}」を飲み、大変味がよいと感じたことが発端といわれる。1886年には温泉の掘削に成功し、温泉場は翌1887年5月に開業した。

J.C. ウヰルキンソンは、創業と同時期

の1890年ごろ、この温泉場に隣接した紅葉谷工場の裏手の山腹に「タンサンホテル」を建設、開業した。「タンサンホテル」は当時まだ国内にも数少なかった本格的な洋式ホテルで、ウヰルキンソンの取引先や観光客など主に外国人に利用された。外国人向けの印刷物には「Hotel Tansan」あるいは「Takaradzuka Hotel」と案内され、国内向けには「炭酸ホテル」「宝塚ホテル」などと称していた。なお、「タンサンホテル」は宿泊客の減少などにより1915(大正4)年に廃業した。



タンサンホテル